

御所市極楽寺ヒビキ遺跡の調査

現地説明会資料資料(2005年2月26日)

調査機関	奈良県立橿原考古学研究所
所在地	御所市極楽寺
調査原因	県営圃場整備事業(葛城西地区)
事業面積	約26,000㎡(平米)
調査面積	約4,000㎡(平米)
主な遺構	濠、大型掘立柱建物跡、塀、渡り堤
主な遺物	須恵器、土師器
現地説明会	2月26日(土曜) 午前9時30分～午後4時 ※説明は随時行います。

1. はじめに

極楽寺ヒビキ遺跡は、御所市大字極楽寺に位置します。県営圃場整備事業に先行して、2004年10月から発掘調査をおこなっています。調査地は、南北を深い谷に挟まれた独立丘陵の先端にあり、古墳時代中期前半の濠に囲まれた大型建物をはじめとする遺構を検出しました。

2. 発掘調査の成果

今回の調査では、以下のような施設を確認しました。

建物1 調査地の西で検出した大型の四面庇付き掘立柱建物です。中心の建物(身舎部分)が2間×2間(8.5m×8.0m)で四面に5間×5間(12.5m×13.5m)の庇がつきます。さらに西と南の二面に6間分の(14.5m～15.5m)の孫庇がつき、縁を巡らせていたようです。平面形は正方形で、床面積は約225㎡あります。柱痕跡すべてに焼土が混じることから、火災にあって焼失したようです。建物の東側には遺構の存在しない空間があり、広場となっています。

建物2 調査地の北東隅で検出した掘立柱建物で、梁間2間(4.5m)、桁行は4間(7.0m)あります。この建物は塀の区画より外側に建てられています。

塀1・2 建物1の西から南へL字に折れ曲がる塀です。現状で南北23.5m、東西51.5mを確認しています。南側では2列になっており、渡り堤に続く場所で途切れており、出入口としての門が想定されます。

塀3・4 調査地の東端で検出した柱列です。この2列の柱列は、柱の大きさに違いはありますが、大型建物の正面に位置することから目隠し的な塀と考えられます。

濠 建物や塀等が存在する範囲は濠で区画されています。区画の西辺・南辺から斜面に葺石が施されていました。北辺と東辺の濠の存在は、後世の地形の改変により不明です。基底石に

人頭大の石を用い、その上方に拳大の石を葺いた状況を確認することができましたが、大半は崩落しています。西側濠の対岸は、曲線を描いています。濠の幅は約15mあり、濠内には意識的に置かれた立石が存在します。

渡り堤 濠で区画された内部に出入りするための陸橋状の遺構です。盛土によって築かれており、幅は3mあります。南に向かってハの字状にひろがり、取り付く部分からは初期須恵器（甕、ハソウ）や土師器の高坏が出土しており、意識的に割られたことがわかるものがあります。

3. まとめ

今回の調査では、石葺きの護岸をもつ濠で区画された大型掘立柱建物などを検出しました。出土土器に供膳具である高坏が多いことから、日常の生活の場とは考えられません。区画内の建物に建て替えがないことも、その性格を表しています。濠内からも出土遺物が少なく、日頃から清潔に保つような維持管理されていたことも想定できます。これらのことから、この大型建物を含めた区画は、祭儀や政務をおこなった公的な性格を持った施設であると思われます。検出した石葺き濠の中に据えられた立石の様子は、後の時期の庭園へのつながりを思い起こさせます。さらに大型建物を区画する空間や区画周囲を廻る石葺きの外堤の様相は、古墳周濠内に設けられた島状遺構との関連も考えさせられます。

この大型建物をもつ区画の構造は単独で成り立つのではなく、区画外堤の西側高台にも関連施設が存在すると思われます。調査地北側の谷筋には、水辺の祭祀をおこなった南郷大東遺跡や、大型掘立柱建物のある南郷安田遺跡などが確認されており、面的な広がりの中で理解する必要があります。

濠で囲まれた区画が造られた時期は、5世紀前半のことです。大和盆地南部では最大の前方後円墳である室宮山古墳（墳長238m）が築造された時期と重なり、密接な関連づけが出来るように思われます。

葛城地域での有力豪族の姿が、より具体的に復原できるようになりました。

今回の調査は、西北窪・極楽寺をはじめとする周辺地区の方々の協力を得るとともに、県農林部耕地課と中部農林振興事務所の理解と協力を得て実施いたしました。



第1図 調査地位置図

「国土地理院発行 1/25,000 地形図（御所）を使用」



第2図 調査地と周辺の遺跡

1/2,500 御所市都市計画平面図 No.19・20



写真1 調査地全景(上が北)

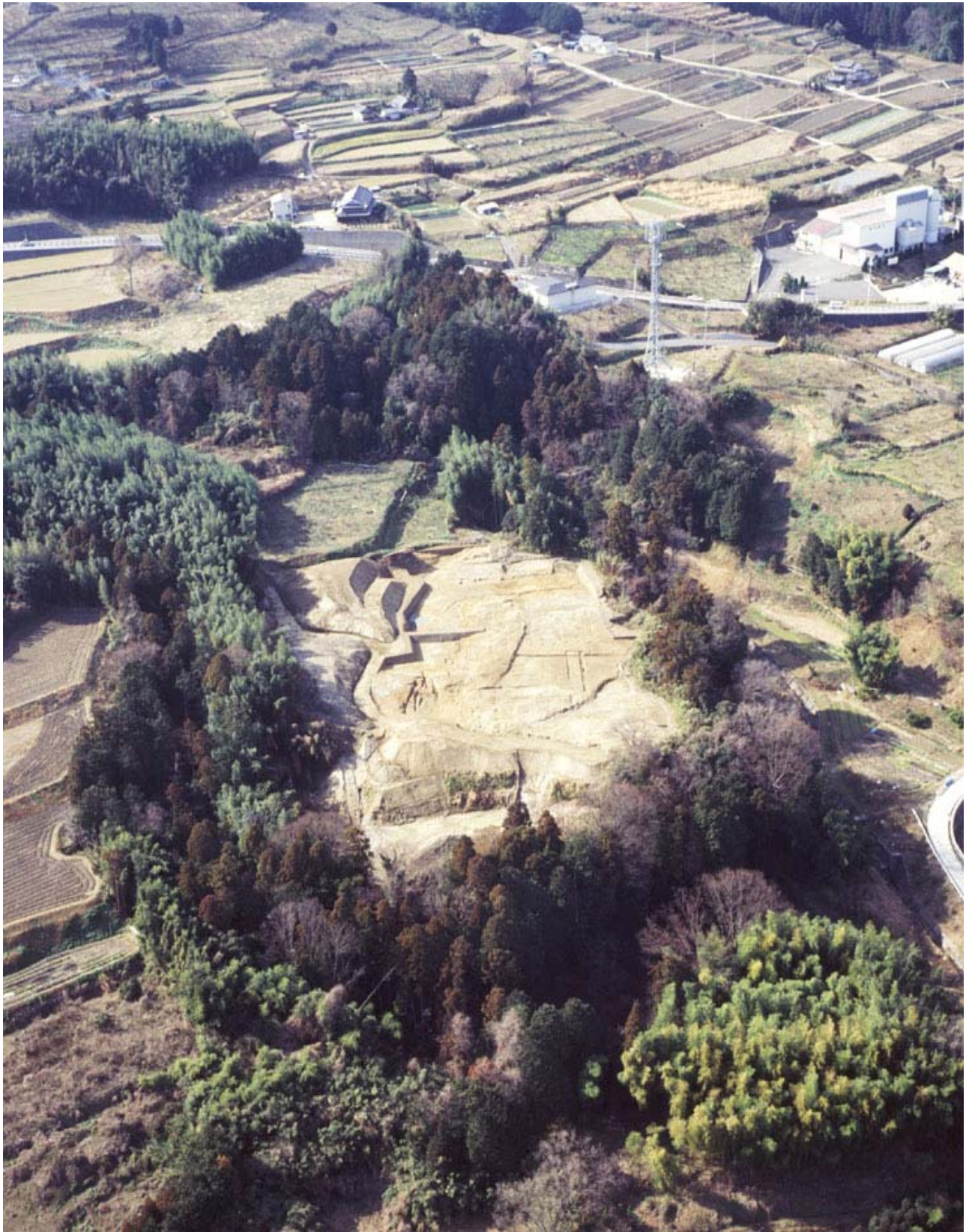


写真2 東方上空より調査地を望む



写真3 調査地南西より奈良盆地を望む



写真4 大型掘立柱建物全景(東南より)



写真5 西濠内の立石



写真6 濠南西隅の葺石

本資料は、奈良県立橿原考古学研究所 北中恭裕・十文字健が作成しました。